

何が若い恋人たちの運命を変えたのか？

— イアン・マキューアンの *On Chesil Beach* —

武藤哲郎

はじめに

イアン・マキューアン (Ian McEwan) は 2001 年 9 月 11 日以来変わったとよく言われる。若い頃はショッキングな逸脱した性を描いていたのが、最近、人間のモラルをテーマに書くようになったからである。テロの翌日すぐマキューアンはガーディアン紙に、ハイジャッカーたちが乗客の立場になって物を考えていたら、あのような行動に踏み切れなかっただろうと書いている。同年発表した小説『贖罪』(Atonement, 2001) では小説家のモラルに触れ、小説家は善悪の判断をしてはいけない、自分の心と同じように他の人の心を生き生きと描くことが唯一小説が持つモラルであると論じている。

On Chesil Beach (2007) はマキューアンの第 11 作目の小説である。166 ページから成る中編小説であるが、『アムステルダム』(Amsterdam, 1998) のような多彩なプロットはない。いくつかの 'flash back' とひとつの 'flash forward' はあるが、あくまでも描かれているのはワン・シーンだけである。

舞台はイングランド南西部ドーセット州の海岸チェジル・ビーチ。時は、1962 年 7 月。主人公は大学で歴史学を専攻したエドワード (Edward Mayhew) と、四重奏のバイオリン奏者であるフローレンス (Florence Ponting) である。二人とも 22 歳。彼らはその日結婚式を挙げたばかりで、新婚旅行でこの海岸にあるホテルに泊まっている。二人は理想的なカップルで、彼らの将来は希望に満ちていた。しかし、二人はあまりに若く純粋でありすぎたために、小さな誤解がもとで言い争いをしてしまう。現代の読者からすれば、たわいのない仲たがいである。しかし、彼らはその後離婚し別々の道を歩んで生涯会うことはなかった。

小説の最後で 60 歳を越えたエドワードは、そのとき初めてフローレンスほど彼が愛した女性はいなかったことに気付く。彼女ほど真剣に彼を愛した女性はいなかったのである。そして、チェジル・ビーチ以来無為に過ごしてきた自分の人生をさびしく省みる。読者はどうしてこのような若くて純粋な理想的なカップルが突然別れなければならなかったのだろうか、その原因を考えて戸惑う。ジョナサン・ケイプ版の表紙に 'a story of lives transformed by a gesture not made or a word not spoken' という文章がある。彼らの人生を大きく狂わせてしまったのは、一体何なのであろうか。

1. 時代背景と小さな誤解

この小説がいつの時代背景なのかは最初から意識的に明らかにされていない。読者はある程度不

安な状態で読み進むことになる。フローレンスの現在の年齢が22歳、エドワードの生まれが1940年、そして二人が同じ年齢であることが順次分かり、結果としてこの小説の舞台が1962年であることがかなり読み進んだ後で判明する。ともかくも、小説の冒頭は次のような文章で始まる。

They were young, educated, and both virgins on this, their wedding night, and they lived in a time when a conversation about sexual difficulties was plainly impossible.¹

主人公のエドワードもフローレンスも、「性の悩み」について互いに口に出すことが全く不可能な時代に生きていた。1962年が具体的にどういう時代であったかは、その翌年の1963年がどういう時代であったのかを考えれば分かる。Philip Larkinは‘Annus Mirabilis’という詩の中で、「性の解放が1963年に始まる（私にとっては遅かったが）。その年は『チャタレイ夫人の恋人』発禁の終焉とビートルズの最初のアルバムのはざまにあった」と書いている²。つまり、長年イギリスで性的に問題視され発売が禁止されていた小説が訴訟の結果それが解かれ、ビートルズが自由な恋愛を謳歌する曲‘Love Me Do’をヒットさせるなどして、世界の人々の性に対する意識を急激に解放に向かわせたのが1963年なのである。1962年はその急激な変化を前にした、イギリスではまだ古い考え方や意識、とりわけ性に関しては若い人たちへの抑圧が色濃く残っていた時代なのである。この時代背景がエドワードとフローレンスの「小さな誤解」を引き起こす原因となった。

具体的にはエドワードは次のような悩みを抱えている。

His [Edward's] specific worry, based on one unfortunate experience, was of overexcitement, of what he had heard someone described as ‘arriving too soon.’ The matter was rarely out of his thoughts, but though his fear of failure was great, his eagerness — for rapture, for resolution — was far greater.³

「早く到達しすぎる」というのが彼の悩みであるが、現代人からするとそれほど深刻な悩みではない。ともかくも、エドワードはこのような気がかりな悩みにもかかわらず、結婚式当夜に寄せる期待は大きい。ところが、逆に花嫁のフローレンスは期待を寄せるどころか、内心恐怖におのっている。

Florence suspected that there was something profoundly wrong with her, that she had always been different, and that at last she was about to be exposed. Her problem, she thought, was greater, deeper, than straightforward physical disgust; her whole being was in revolt against a prospect of entanglement and flesh; her composure and essential happiness were about to be violated. She simply did not want to be ‘entered’ or ‘penetrated.’ Sex with Edward could not be the summation of her joy, but was the price she must pay for it.⁴

彼女の悩みは、性に対して生理的に嫌悪感を抱いていることである。体を触れ合うことは彼女にとって喜びでは決していない。彼女自身、体質的にどこか悪いのではないかと思っている。結婚式当夜は彼女にとって過酷な通過儀礼であった。しかし、エドワードの場合と同様、フローレンスの悩みも現代人の見地からすればそれほど深刻な病ではなく、カウンセリングを受ければ完治する可能

何が若い恋人たちの運命を変えたのか？

性の大きい精神的な病である。むしろ、問題は彼ら二人が抱えている性的悩みを誰にも打ち明けることができない、あるいはそうさせなかった環境、つまりその時代背景にある。この点が二人の「小さな誤解」を生む大きな引き金となったのである。

マキューアンが何故 *On Chesil Beach* の時代設定を 1962 年にしたのかについて、彼自身インタビューで次のように答えている。

It seemed a slightly neglected time to me. When people say the Sixties, they don't mean 1962... even 1966, and I very much wanted a narrator who would be aware that this was on the shore of those times, the great shift in social attitudes... I think of a friend like (critic) Ian Hamilton who used to run the *The New Review*... He was only five, six years older than people like myself, Martin Amis, but he really disapproved of our ways and dress and hair.⁵

マキューアンは 1962 年が歴史的にあまり人々から顧みられない年であると述べている。そして、その時代の人、彼よりもわずか 5、6 歳上の友人の批評家に服装や髪型について小言を言われ、ジェネレーション・ギャップを肌で感じたことを書いている。1962 年は我々の想像以上に強く古い慣習や意識が残っていたのである。マキューアンは今まで小説の中で主人公たちをいろいろな時代設定の中に立たせている。たとえば、*The Child in Time* (1987) では時代を近未来に設定して、息子と母親が時空を越えて相対するような幻想的な雰囲気漂わせている。*Black Dogs* (1992) では語り手と祖父をベルリンの壁崩壊の現場に立たせることによって、今なお残っているナチの狂気を黒い犬に象徴させている。つまり、マキューアンはそれぞれの小説を異なる時代に設定することによって、いろいろな目的を達成してきたことになる。*On Chesil Beach* では時代を 1962 年に設定することによって、性に関して頑ななまでに古い意識が残る時代に設定することによって、若い恋人たちの「小さな誤解」を生じさせようとしたのである。

さて、彼らの誤解はどのようにして始まるのだろうか。まずエドワードの誤解はフローレンスの動揺を次のように熱意と勘違いしたことから始まる。

She was doing all she could to prevent a muscle in her leg from tightening, but it was happening without her... she felt it was letting her down, giving the first indication of the extent of her problem. He surely felt the little storm beneath his hand, for his eyes widened minutely, and the tilt of his eyebrows and the soundless parting of his lips suggested that he was impressed, even in awe, as he mistook her turmoil for eagerness.⁶

エドワードの手は彼女の太ももにある。フローレンスは触れられていることが我慢ならないが、自分は性的に問題があると彼に知られては困る。彼女は誰にもこのような悩みを打ち明けることができなかった。母親は、おかしなことに小さいときから彼女を抱いたり、キスをしたりすることはなかった。彼女がこのように性に恐怖を抱くのもその原因の一端は母親にあるのかもしれない。ともかくも、エドワードに触れられている太ももは緊張のあまり、つりそうになる。彼女は何とかしてそれを防ごうと顔をしかめる。彼には、以前映画館で彼女の手を握ってそれを自分に押し付けたために、フローレンスが驚いて通路に逃げた苦い経験がある。ところが、今彼は彼女の困惑した顔

を熱意と勘違いして、彼女の体に覆いかぶさる。彼女もその夜を成功させなければならないと思う。心にあるのは、何としても平静を装って、彼を喜ばせることしかなかった。彼女はガイド・ブックに載っていた「花嫁が男を導いても構わない」を思い出した。しかし、「それ」がいかにも繊細で粗野か彼女は知らなかった。これが、フローレンスのほうの小さな誤解であった。

How could she have known what a terrible mistake she was making? Had she pulled on the wrong thing? Had she gripped too tight? He gave out a wail, a complicated series of agonized, rising vowels, the sort of sound she had heard once in a comedy film when a waiter, weaving this way and that, appeared to be about to drop a towering pile of soup plates. In horror she let go, as Edward, rising up with a bewildered look, his muscular back arching in spasms, emptied himself over her in gouts, in vigorous but diminishing quantities, filling her navel, coating her belly, thighs, and even a portion of her chin and kneecap in tepid, viscous fluid.⁷

この場面は読んでいてまるでコメディイのようである。しかし、それは現代人の我々が読むからそうなのであって、その時代のエドワードとフローレンスからすれば、まさに真剣そのものであり、ふざけた気持ちは微塵もない。さらにこの場面は読者にマキューアンの「十八番」のグロテスクさを思い出させる。フローレンスは彼のぬるぬるとした体液が自分の体を浸し、それが潮風によって冷たく固まっていくのを感じたとき、それまで押し殺していた自分の感情が一気に爆発し、嫌悪の叫び声を上げて寝室から飛び出し、浜辺へと逃げていく。

2. *On Chesil Beach* の小説としてのモラル

2001年9月11日のあの事件の後すぐにマキューアンがガーディアン紙に出した記事は次のようなものである。これを読んで感動した読者も少なくなかった。

If the hijackers had been able to imagine themselves into the thoughts and feelings of the passengers, they would have been unable to proceed. It is hard to be cruel once you permit yourself to enter the mind of your victim. Imagining what it is like to be someone other than yourself is at the core of our humanity. It is the essence of compassion, and it is beginning of morality.⁸

マキューアンは、自分ではなく他人の身になって考えることが人間性の根幹にあると考える。それが思いやりの本質であり、モラルティーの始まりなのである。彼はこのように人としての道を説き、少しでも他人の身になって考える気持ちがあれば、テロリストたちはあのような行動を起こすことはなかっただろうと書いている。マキューアンは同じ年に『贖罪』という小説を発表している。その中で彼は、上述した人としてのモラルを小説のモラルに発展させて論じている。

She could write the scene three times over, from three points of view; her excitement was in the prospect of freedom, of being delivered from the cumbrous struggle between good and bad, heroes and villains. None of these three was bad, nor were they particularly

何が若い恋人たちの運命を変えたのか？

good. She need no judge. There did not have to be a moral. She need only show separate minds, as alive as her own, struggling with the idea that other minds were equally alive. It wasn't only wickedness and scheming that made people unhappy, it was the confusion and misunderstanding; above all, it was the failure to grasp the simple truth that other people are as real as you. And only in a story could you enter these different minds and show how they had an equal value. That was the only moral a story need have.⁹

「彼女はその場面を3つの視点から書くことができた」とあるが、これは語り手（ブライオニー）とその姉（シーリア）、そしてその恋人（ボビー）の立場からである。ブライオニーは幼い頃に犯した誤解からシーリアとボビーの運命を大きく変えてしまった。彼女は年老いてから償いとして、3人の身に起こったことを小説にしようとしている。3人のうち誰が悪人で、誰が善人であったかというような判断をしてはいけないと彼女は思う。小説に善悪の判断はいらないのである。彼女に必要なのは3人の異なった心を、彼女自身の心と同じように生き生きと描くことであった。小説においてのみ、人は他人の心に入り込むことができるし、それが自分の心と同じ価値を持つものだと認識できる。それが、小説が持つ唯一のモラルなのである。マキューアンはこのように人としてのモラルを小説家としてのモラルに発展させて考えることができると論じている。

さて *On Chesil Beach* をこの「小説のモラル」という観点から見ると、どうなるのであろうか。確かにマキューアンはエドワードとフローレンスの視点に交互に立って、この事件を表面的には善悪の判断をせずに公平に扱っている。しかし、彼はどちらかというところエドワードのほうに非があるような微妙な書き方をしている。エドワードはフローレンスが次のように海辺で自分のほうから謝罪したのに、それを許そうとはしなかった。

That I'm hopeless, absolutely hopeless at sex. Not only am I no good at it, I don't seem to need it like other people, like you do. It just isn't something that's part of me. I don't like it, I don't like the thought of it. I have no idea why that is, but I think it isn't going to change. Not immediately. At least, I can't imagine it changing. And if I don't say this now, we'll always be struggling with it, and it's going to cause you a lot of unhappiness, and me too.¹⁰

彼女はこのように告白することによって、初めてプライドを捨ててエドワードに謝罪しているのである。彼女は続けて、ホモ・セクシュアルである母の知人が静かに、他人に迷惑をかけず上品に暮らしている例を引き合いに出す。二人ともそのようなひっそりとした生活ができれば、少なくとも時間をかければ彼女の問題も解決する道もあることを暗に示したのである。しかし、エドワードは「ホモ・セクシュアル」という言葉を聞いた途端に嫌悪感をあらわにして、そんな生活はできないと激怒する。やはりそういう時代であったのであろう。彼は次のように言うてはいけない言葉を彼女に浴びせかける。

You tricked me. Actually you're fraud. And I know exactly what else you are. Do you know what you are? You're frigid, that's what. Completely frigid. But you thought you needed a husband, and I was the first bloody idiot who came along.¹¹

「不感症」という言葉は、女性にあらざりというほどの強い意味をこの当時持っていたであろう。フローレンスは別に好き好んで性に恐怖を抱いたわけではない。彼女の生い立ちがそうさせた可能性が高いということがこの小説を読めば分かる。彼女はただ純粋で正直で、無知で臆病だっただけである。彼女が自分の性に関する問題をエドワードに告白して謝罪するには大きな勇気が必要であったろう。フローレンスは彼の最後の言葉を聞いて、「エドワード、ごめんなさい。本当にごめんなさい」と小さく言ってホテルに帰って行った。

3. ‘flash back’ におけるエドワードの母親

この小説にはチェジル・ビーチでの場面のほかに、若干フラッシュ・バックとしてエドワードとフローレンスの生い立ちにまつわる話が語られる。そのひとつは、エドワードとフローレンスの家庭の階級差である。彼の父親は小学校の教員で、彼女の父親は電気製品会社の社長である。エドワードは、彼女の家に行って初めて氷の入っている飲み物（ジン・トニック）を飲み、初めてサラダというものを食べた。彼女の父親は持参金としてフローレンスに2,000ポンド与えた。おまけに、エドワードを自分の会社の社員にしようと就職の世話までした。エドワードの立場からすると男として負い目があるわけである。浜辺で言い争いになったとき、彼女はいつも自分に対して要求が強いという意味で‘wheedling’という言葉を使う。エドワードはそれを「金を巻き上げる」という意味に誤解してしまう。喧嘩になると売り言葉に買い言葉で、フローレンスは最初その語をそういう意味で使っていなかったのが、そういう意味で使い始め彼の自尊心を傷つけてしまう。

もうひとつはフローレンスの父親の描写である。以下の描写は、彼女が幼い頃父親の虐待に会ったような意味にもとれて曖昧である。

Here came the past anyway, the indistinct past. It was the smell of the sea that summoned it. She was twelve years old, lying still like this, waiting, shivering in the narrow bunk with polished mahogany sides. Her mind was a blank, she felt she was in disgrace. After a two-day crossing, they were once more in the calm of Carteret harbour, south of Cherbourg. It was late in the evening, and her father was moving about the dim cramped cabin, undressing, like Edward now.¹²

わざと曖昧に書いて読者の判断に任せようという狙いがマキューアンにありそうである。二人の批評家がこの文章から、フローレンスが子供時代に父親から性的虐待を受けたと指摘している¹³。そうすると彼女が性に恐怖を抱くのも当たり前のこととなる。

父親の虐待が指摘されれば、エドワードの瞬時に暴力を振るう性癖も指摘しなければならない。彼は若い頃から、特に大学生になるとパブで飲んで、外で殴り合いの喧嘩をすることが多かった。この小説で具体的にひとつの事件として描かれているのは、彼が大学の友人と通りを歩いているときのことである。その友人は背が低く、分厚いレンズのメガネをかけ、やたらとおしゃべりな、つまりいじめに合いそうなタイプの男であった。通りの向こうから暴走族らしき男女が歩いてくる。すれ違いざま、その男はエドワードの友人の頭を後ろから平手で叩いてよろめかせメガネを飛ばしてしまった。その男からするとただ恋人を面白がらせたかっただけであろう。しかし、それを見たエドワードは何も言わず、友人の「よせ」という言葉も耳に入らず、その男を追いかけ右手で肩に手をかけて振り向かせ、左手で喉を押さえ壁に押し付けて、右手でこぶしを作って思い切り顔を殴っ

何が若い恋人たちの運命を変えたのか？

てしまう。この事件の後エドワードは友人から感謝されるだろうと思ったが、結果は逆であった。些細なことで逆上し暴力を振るう男は都会の知識人としての大学生の間では、流行らないのである。田舎もののものであった。以来友人は彼を敬遠するようになった。この事件以来エドワードは暴力を振るわなくなった。

フローレンスの父親の虐待、エドワードの暴力の性癖を上げたのは理由がある。それは、それらが「男」の暴力的なイメージをこの小説の中でだんだんと形作り、最後の結末へと集約していくからである。具体的にそれに触れる前に、反対にこの小説に「女」の優しさのイメージがないかどうか見てみたい。

エドワードの母親が普通の人間ではないことは小説の冒頭から読者は気付いている。彼が父親から母親のマージョリー (Marjorie) が「脳傷」であることを聞いたのは14歳のときであった。母親が尋常の人間ではないことを知らせるのを、エドワードが物心つくまで父親は待っていた。マージョリーは彼が5歳のとき買い物に出かけ、駅で汽車を待っていた。汽車が止まる前にドアを開いて飛び降りるのが一種の流行になっていたらしい。そのときもある紳士が、列車が完全に止まる前にドアを開いて飛び降りるのを待っていた。そのとき運転手が急にブレーキをかけて開いた鉄製のドアがマージョリーの頭に当たり骨を砕いて、脳に損傷を与えた。彼女は一週間意識がなく、取り戻したときには記憶がすべてなくなっていた。以来、すべての家事は父親が行い、子供たちの世話も父親が行った。しかし、彼女は依然としてその家の女主人であった。そのように、つまりマージョリーがごく普通の人間のように家族 (二人の双子の女の子も含めて) が振舞ったのであった。夕食は父親が作るが、食べ終えた後いつも決まってみんながマージョリーに感謝する。そのあと彼女は「仕事 ('project) 」と称して、彼女の世界に入っていく。たとえばピアノであるが、いつも同じ箇所をつかえてしまう。花壇も作っているが、形を成していない。水彩画も描くが筆を洗おうとしない。そんな折、彼女は突如として子供たちの母親としての義務を思い出すのである。

It never occurred to Edward to ask himself if she was happy. She certainly had her moments of anxiety, panicky attacks when her breathing came in snatches and her thin arms would rise and fall at her side, and all her attention was suddenly on her children, on a specific need she knew she must immediately address. Edward's fingernails were too long, she must mend a tear in a frock, the twins needed a bath. She would descend among them, fussing ineffectually, scolding, or hugging them to her, kissing their faces or doing all at once, making up for lost time. It almost felt like love, and they yielded to her happily enough. But they knew from experience that the realities of the household were forbidding — the nail scissors and matching thread would not be found, and to heat water for a bath needed hours of preparation. Soon their mother would drift away, back to her own world.¹⁴

小説の手法に 'fragmentalism' というのがある。小説の筋とは一見関係のないエピソードが、独立してひとつの世界を作ってしまうことである。エドワードの母親のエピソードを読むとまさにその観がある。マージョリーは奇怪ではあるが、まるで天使のように純粋に生き生きと描かれている。「子供たちのところに降りてくる」、あるいは「母親はするりと自分の世界に戻っていく」という表現に、マキューアンのその意図があるように思われる。

4. エドワードの ‘flash forward’

エドワードがホテルに帰ると、フローレンスは荷物をまとめて出て行ったあとだった。身内に突然不幸があったと取り繕ったので、ホテルの支配人は駅まで彼女を車で送って行った。エドワードはその夜一人でホテルに泊まり、翌日フローレンスの父親から借りた車を返し、自分の家に戻る。しばらくして、フローレンスの家から結婚式の祝いものが返され、二人の離婚が正式に決まる。その後エドワードはロンドンでレコード店に勤めるようになる。結婚もするが、長くは続かなかった。彼はいつもフローレンスのことを考えていた。彼女からホモ・セクシュアルの人々のような静かな生活を提案されたとき激怒した彼だが、今は考え方が違っていった。

Towards the end of that celebrated decade, when his life came under pressure from all the new excitements and freedoms and fashions, as well as from the chaos of numerous love affairs — he became at last reasonably competent — he often thought of her strange proposal, and it no longer seemed quite so ridiculous, and certainly not disgusting or insulting.¹⁵

彼女が提案した静かな生活も、今となってはそれほど奇異なものではなくなっていた。彼はレコード店に勤めながら、音楽雑誌に時々記事を書いていた。1968年に彼はある四重奏の若いグループが華々しくデビューしたのを知る。フローレンスはそのバイオリン奏者であった。彼女のことは記事に「モーツァルトや音楽だけではなく、人生に恋をした女性」と書かれてあった。彼女は充実した生活を送っているようであった。それに引き換え彼は毎日無為な生活を送ってきたと自分でも思う。そして次のように、彼女と結婚しなかったことを初めて後悔するのである。

At last he could admit to himself that he had never met anyone he loved as much, that he had never found anyone, man or woman. Who matched her seriousness. Perhaps if he had stayed with her, he would have been more focused and ambitious about his own life, he might have written those history books.¹⁶

彼ら二人が別れてからの ‘flash forward’ はすべてエドワードの視点からの描写である。フローレンスの視点からは何も描かれていない。彼女の心の中でエドワードのことは整理が付いているのか、まだ彼のことを忘れられないでいるのか読者には分からない。ただ、自分の夢を追いかけて努力し、その努力が実って音楽界にデビューしたのだから、エドワードと違って充実した人生を送っていることは間違いない。それゆえ彼女は「人生に恋をしている」と雑誌で賞賛されたのである。小説の最後は、次のような文章で結ばれている。

All she had needed was the certainty of his love, and his reassurance that there was no hurry when a lifetime lay ahead of them. Love and patience — if only he had had them both at once — would surely have seen them both through. And then what unborn children might have had their chances, what young girl with an Alice band might have become his loved familiar? This is how the entire course of life can be changed — by

何が若い恋人たちの運命を変えたのか？

doing nothing. On Chesil Beach he could have called out to Florence, he could have gone after her... she would have turned back.¹⁷

今思うと、エドワードはあのとき結論を急ぐべきではなかった。時間が十分にあるのだから、フローレンスがそうしたいと言ったようにしばらく静かに生活すればよかったのである。そうすれば子供も生まれ、アリスバンドをつけた女の子が愛する家族になっていたかもしれない。あの時彼はホテルに帰ろうとする彼女に声をかけるべきだったのである。かけていれば彼女は振り向いたであろう。小さな誤解も解けたに違いない。何も行動を取らないことによって、何も言葉を発しないことによってこのように人の人生が大きく変わってしまうことを彼は今になって痛恨の情を持って省みる。

もう少し「愛と忍耐」を彼が持っていたら二人は別れなくてすんだに違いないというのが、エドワードの気持ちであり、マキューアンの気持ちでもある。小説家は善悪の判断をしてはいけない、つまりモラルの判断をしてはいけないというのがマキューアンの持論であった。しかし、微妙なところで、彼はそれを行っているのである。行っているからといって、小説の価値を減じるものでは決してない。たとえば、この部分にフローレンスの‘flash forward’を入れてみたらどうなるであろうか。彼女はエドワードのことを忘れているか、それとも忘れていないかそのどちらかであろう。どちらにしても、彼女の視点に立った描写は蛇足以外の何ものでもないであろう。フローレンスの近況が述べられていないからこそ、エドワードの悔いというか悲哀が倍增するのである。*On Chesil Beach* は今までマキューアンの小説にはなかった恋愛小説の切なさを醸し出して新鮮である。

おわりに

エドワードとフローレンスの人生を大きく狂わせたのは1962年という時代であった。性の解放を翌年に控えたこの時代は、性の悩みを他人に打ち明けることは不可能な古い因習が色濃く残っていた。そしてそれが原因となって、彼らの小さな誤解を生むようになった。小さな誤解が大きな誤解になるが、エドワードが一言優しい言葉をフローレンスにかけていれば、彼らは別れなくて済んだであろう。純真無垢な人々の生活がちょっとした偶然で大きく変わることは、マキューアンが最近好んで用いるプロットである。たとえば『愛の続き』(*Enduring Love*, 1997) でジョーが風にあおられたゴンドラに手を貸さなければ彼の運命は平穏だったに違いない。『土曜日』(*Saturday*, 2006) では、もしペロウンが数分でも早くあるいは遅く車で家を出ていれば、彼の家は襲われずに済んだであろう。

この小説の舞台になっているチェジル・ビーチは、海辺といっても砂利の浜辺である。我々が連想するような明るい砂浜ではない。黒いごつごつとした石が18マイルにも渡って続き、古代から海は荒い波によってその石を侵食し続けている。「古代からの荒々しさ」は男の暴力、ひいてはエドワードの暴力を連想させる。フローレンスとその浜辺で美しい鳥の鳴き声を聞き、それをナイチンゲールと思うのはエドワードの母親に象徴される「女」の優しさであろうか。結局、エドワードは立ち去るフローレンスに声をかけなかった。このような場所に二人を立たせたのもマキューアンの意図が少なからずありそうである。

注

1. *On Chesil Beach*, p. 3.
2. 'Innocents abroad', p. 2.
3. *On Chesil Beach*, p. 7.
4. *Ibid.*, p.9.
5. 'Book Talk', p. 1.
6. *On Chesil Beach*, p. 85.
7. *Ibid.*, pp. 104-105.
8. 'Only love and then oblivion', p. 3.
9. *Atonement*, p. 40.
10. *On Chesil Beach*, p. 153.
11. *Ibid.*, p. 156.
12. *Ibid.*, p. 99.
13. 'The Magus of Fitzrovia', p. 2. および 'Young love, old angst', p. 4.
14. *On Chesil Beach*, pp. 66-67.
15. *Ibid.*, p. 160.
16. *Ibid.*, p. 165.
17. *Ibid.*, p. 166.

参考文献

作 品

1. McEwan, Ian. *Atonement*, Jonathan Cape, 2001.
2. *Ibid.*, *Black Dogs*, Jonathan Cape, 1992.
3. *Ibid.*, *Enduring Love*, Jonathan Cape, 1997.
4. *Ibid.*, *On Chesil Beach*, Jonathan Cape, 2007.
5. *Ibid.*, *The Child in Time*, Jonathan Cape, 1980.
6. *Ibid.*, *Saturday*, Jonathan Cape, 2006.

批 評

1. Adams, Tim. 'Innocents abroad', *The Observer*, March 25, 2007.
2. d'Ancona, Matthew. 'The Magus of Fitzrovia', *The Spectator*, April 7, 2007.
3. McEwan, Ian. 'Only love and the oblivion', *The Guardian*, September 15, 2001.
4. Walter, Natacha. 'Young love, old angst', *The Guardian*, March 31, 2007.

インタビュー

1. Collett-White, Mike, *Reuters*, April 24, 2007.